

## 太郎兵衛平（標高 2,300m）～上ノ岳（標高 2,600m）付近の Almanac

大村顕介（会員）

### 7月中旬の太郎兵衛平～太郎山

ライチョウを調査している北アルプス太郎兵衛平は標高約 2,300m で、概ね森林限界付近です。太郎平小屋のある太郎兵衛平から太郎山のなだらかな山稜には無数の池塘といくつかの雪田が広がります。



このあたりは緩やかな地形と多量の積雪により、亜高山帯に多く生えているアオモリトドマツやダケカンバといった高木が侵入できず、カヤツリグサ科を主体とする湿原となっています。また、ハイマツも湿原の際や、登山道沿いに主に生育します。

登山道沿いでまず目を引くのはチングルマの白い花です。チングルマは環境適応能力が高いのか、湿原の中でも雪田の中でも生育します。とりわけ日当たりと水はけの良い雪田の上部では大きなマット群落を作ることもあります。高山を代表する花です。

変わったところではシロバナノタテヤマリンドウが見られました。タテヤマリンドウは紫色をしていますが、太郎山周辺では白花種が多く見られます。

池塘の中ではイワイチョウが花を咲かせていました。



雪解けから少し経ったこの時期は、湿原は白い花で春を迎えています。

## 7月中旬の上ノ岳



太郎山から南の鞍部へ下って、そこから上ノ岳の肩へ登り上げていく間は、森林限界と高山帯の間のような光景に出会います。そこにはいくぶん背丈の低いアオモリトドマツが立ち並び、その下にはハイマツ群落があります。ここは非常に雪が厚い北側斜面です。太郎山に比べて急傾斜なので水はけが良い為に湿原が成立しません。ハイマツが全く這っていませんが、これが北半球の周北極地域で見られるハイマツの姿に近いものです。



登山道沿いに目を向けると、ミネズオウが花の満開でした。ミネズオウもチングルマと同じく適応の幅が広い植物のようですが、こちらは常緑木本です。堅くて小さな葉が特徴で、日当たりの良い場所なら風衝地のような乾燥の厳しいところでも、湿地でも出てくる植物です。



アオノツガザクラの花も咲いていました。ミネズオウが日あたりさえよければどこにでも出てくるのに対して、アオノツガザクラは水はけが良く、かつ水が豊富な場所で群生します。特に雪田群落の下部や、雪解けの遅い場所で見られます。ここは上ノ岳への急斜面で、上から水が豊富に供給され、登山道沿いは水はけも良いので生育しているのでしょう。

写真にはアオノツガザクラの後ろにガンコウランも写りこんでいます。違いがわかるでしょうか。非常によく似ていますが、ガンコウランよりは葉が大ぶりで、葉に鋸歯があることで、花がない時期にも見分けることができます。



上ノ岳への急登を登りあげると、旧上ノ岳小屋跡に着きます。ここからは、高山帯の様相を呈してきます。

ほとんど雪が溶けたばかりのようですが、それでも何種類かの花が咲いていました。

ショウジョウバカマは高山植物というわけではなく、里から高山まで湿った場所ならどこでも生えてくる根性のある植物ですが、特徴として高度が上がるほどに花のついている茎が短くなります。登山口では10センチ程もあった茎が、上ノ岳では数センチです。写真のショウジョウバカマの周囲には、フキノトウのようなものが見えています。これはハクサンイチゲの若芽です。ハイマツ群落の周辺では花が咲いている個体もありました。ハクサンイチゲは高山の草原ならどこにでも見られる一年草です。もう少しすれば、上ノ岳山頂の手前はハクサンイチゲとアオノツガザクラの花で埋め尽くされることでしょう。



山頂付近の風衝地で珍しい花を見つけました。ムシトリスミレです。こう見えて食虫植物です。葉の表面に粘液球のついた繊毛があり、虫を捕まえます。葉自体は調査中にもよく見かけましたが、花が咲いているところはあまり記憶にありません。植物らしからぬ葉の方が印象的です。

こちらにも花が咲いている記憶がほとんどないツマトリソウです。よくハイマツ群落内で見かけます。鎧の「威（おどし）」（鉄片を糸などで連ねた物を）に、様々な色目（糸の色ですね）があって、その中で「棲取威」というものがあって、それに花卉の縁が似ているとか（言葉では説明しづらいので、画像検索してみてください）。

七月中旬の山頂部は、やっと雪が溶けてやっと春がやってきたという様相です。

